

令和元年5月18日現在

機関番号：32427

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K12223

研究課題名(和文) 消滅危惧集落の1人暮らし男性高齢者を支える地域支援システムの構築

研究課題名(英文) Construction of Community Support Systems Supporting Elderly Men Living Alone in Villages at Risk of Disappearing.

研究代表者

藤川 君江 (FUJIKAWA, Kimie)

日本医療科学大学・保健医療学部・教授

研究者番号：20644298

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：消滅危惧集落の1人暮らし男性高齢者を支える地域支援システム構築の基礎調査を目的とし、4地域の1人暮らし男性高齢者23名への聞き取り調査及び行政と地域支援センターの担当者から高齢福祉サービスの現状と課題について聞き取り調査を行った。その結果、1人暮らし男性高齢者は、子どもや孫、兄弟など限られた人間関係であり、孤立しやすい状況にあった。また、男性高齢者は健康への不安と1人暮らしの気楽さを持って生活していたことが明らかとなった。今後、地域特性及び高齢者の強みを活かした地域支援システムの構築を進めることが課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、地域支援システムの構築ができれば、1度は生まれ育った地域を離れた子どもたちが、定年退職後に再び故郷に戻り定住することが可能となり、定住することで人口減少が抑えられると考える。また、1人暮らし男性高齢者の課題である孤立や孤独死などの問題解決並びに近隣住民との人間関係のあり方など、具体的な支援方法の提案ができると考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the study was to do basic researches for building community support-systems in order to support elderly men living alone in villages at risk of disappearing. The interview was done with 23 elderly men living alone in four villages. The other interview was also conducted with staffs in government and community support center to hear about current status and problems of senior citizen welfare services. As a result, the elderly men living alone tended to be isolated due to their limited-relationship with their children, grandchildren, brother or sister and so on. It is also clarified that they were living with both anxiety for health and easiness of single blessedness. Thus, promotion of establishing the community support system utilizing advantages of both being the elderly and community characteristics is an issue in the future.

研究分野：高齢者看護

キーワード：一人暮らし男性高齢者 後期高齢者 消滅危惧集落 生活課題 孤立リスク 豪雪地帯 離島

様式 C - 19, F - 19 - 1, Z - 19, CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本は、生活水準の向上や医療の発展により、世界有数の長寿国となった。一方、超高齢社会となり、1人暮らし高齢者が増加傾向にある。特に男性高齢者の1人暮らしが社会的に孤立しやすいことが報告されている。しかし、これまで1人暮らし男性高齢者を対象とした支援に関する研究は少なく、東日本大震災の被災地や過疎地域、特に離島の1人暮らし男性高齢者を対象とした研究報告がほとんどされてこなかった。1人暮らし男性高齢者は、人との交流が少ない人や頼れる人がいないことで孤立しやすい状況にあることから、1人暮らし男性高齢者支援は早急に取り組むべき課題であると考えられる。

申請者は平成21年から、A県Q島の1人暮らし男性高齢者を対象に、生活自立の要因に関する研究を実施してきた。Q島は昭和30年代まで人口3,000人を超えており、遠洋漁業の基地として栄えた漁村であった。しかし、若者の島外への流出により人口の減少と高齢化が進行した。平成27年4月の人口は391人、高齢化率71.1%と人口の減少と高齢化率の上昇は顕著である。Q島は、限界集落から消滅危惧集落へ向かって進んでいる。

平成23年の東日本大震災では、Q島に津波が直撃し沿岸周辺の家屋や漁船が流失するなど甚大な被害を受けた。島民同士が声を掛け合い全員が避難し、死者・行方不明者ゼロであった。しかし、漁を仕事としている男性高齢者にとって、漁ができないことは精神的ダメージであり、島を去った高齢者が増えた。その一方で、Q島で暮らし続けたいという思いが強くなった高齢者もいた。今までQ島の人々は、島民同士で助け合って生活してきた。しかし、人口減少と高齢化率の上昇により島民同士で助け合うことには限界があり、今後は難しいと考える。今回の研究では、1人暮らし男性高齢者が今までに培ってきた生活力を活かし、最期まで自分らしい人生を全うできる地域支援システムの構築に向けた具体的な提案をすることが必要だと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、消滅危惧集落の1人暮らし男性高齢者が最期まで自分らしい人生を全うできる地域支援システムの構築に向けた具体的な提案することである。本研究は、3つで構成され、以下について明らかにすることを目的とした。

- (1) 1人暮らし男性高齢者の生活状況を明らかにするため聞き取り調査を行い、生活課題を質的に明らかにする。
- (2) 消滅危惧集落に暮らしている住民を対象に主観的幸福感調査を行い、1人暮らし高齢者との差異を量的に明らかにする。
- (3) 行政の高齢福祉課担当者及び地域包括支援センターの担当者に高齢者サービスの現状と課題について聞き取り調査を行い、1人暮らし男性高齢者が最期まで自分らしい人生を全うできる地域支援システムの構築に向けた具体的な提案を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、3つの調査を以下の方法で行った。

(1) 一人暮らし男性高齢者の聞き取り調査：対象者の選定：Q島、M町、E町、U町（総務省が指定する過疎地域であり、高齢化率40%以上の地域）4地域の市町村役場の高齢福祉課または地域包括支援センターの担当者に研究の目的・方法を文書と口頭で説明し、対象者の紹介を受けた。調査方法：75歳以上で自立した生活を送っている1人暮らし男性高齢者に半構造化面接を実施した。調査内容：生活状況や近隣との人間関係、家族関係、受診状況、楽しみ、1人暮らしへの不安などについて半構造的面接法による聞き取り調査を実施し、1人暮らし男性高齢者の生活課題を明確にした。分析方法：インタビュー結果を全て書き起こし逐語録を作成した。逐語録をデータとし質的帰納的に分析した。

(2) 主観的幸福感調査：PGC モラールスケール改訂版の調査票を用いた。協力者の募集方法：消滅危惧集落は、住民健康診断会場や高齢者の集会に研究者が出向き研究の目的と方法、結果の公表について文書と口頭で説明した。関東圏の都市部は、老人大学、囲碁クラブ、町内会会長などの代表者に調査の目的と方法、結果の公表について文書と口頭で説明し、協力の得られた代表者に調査表の配布を依頼した。調査票の回収方法：消滅危惧集落では、記入後専用の回収ボックスに投函してもらった。関東圏の都市部は代表者にアンケート用紙の回収を依頼し、郵送法にて調査票を回収した。アンケート用紙は封筒に入れて配布し、封筒に入れてもらい回収した。分析方法：主観的幸福感は1人暮らしと同居家族の有無、住んでいる地域による比較を行った。統計解析にはIBM SPSS Statistics 24を用い、統計学的有意差について確認した。

(3) 支援者からの聞き取り調査：協力者：B県M町、C県E町は、地域包括支援センター担当者の保健師、社会福祉士、ケアマネージャー、C県U町は高齢福祉課職員。調査方法：半構造化面接を実施した。調査内容：現在行われている高齢者支援の現状と課題。分析方法：逐語録から、インタビュー中の対象者の発言のみを取り出し、KH Coderを用いたテキストマイニング分析を行った。回答内容のエラーの有無を確認した後、形態素に分解し処理を行った。分析は、回答内容の出現頻度を算出し、頻出語を用いて共起ネットワーク分析及び階層的クラスタ分析を行った。

4. 研究成果

(1) 1人暮らし男性高齢者の生活課題の明確化：調査対象者は77歳から95歳の23人、平均年齢82.3歳であった。Q島4名(平均年齢82.2歳)、M町5名(平均年齢84.4歳)、E町8名(平均年齢86.1歳)、U町6名(平均年齢84.5歳)に3-4回聞き取り調査を行った。1人暮らしの生活課題を質的帰納的分析し、類似する意味のものを組み合わせ、見出しをつけた。類似する見出しを統合し、サブカテゴリー名をつけた。さらにサブカテゴリーの意味が共通しているものを統合し抽象度をあげて、カテゴリーとし、カテゴリー名をつけた。カテゴリーを【 】、サブカテゴリー《 》で示す。

身体面の課題は、《体力の衰えを感じている》《いつどうなるかわからない》など【健康不安】であった。対処法として《歩くように心掛けている》《料理は面倒でも3食作って食べる》《栄養剤で体調を整える》など健康を考えが生活を行っていた。1人暮らしができる身体を維持するために健康管理が課題であることが明らかになった。

心理面の課題は、《家に来る人がいない》《妻がいたら良いと思う》《子どもたちに迷惑をかけたくない》など【頼れる人が身近にいない】ため、他者との交流が少ない状況であった。また、《人がいなくて寂しい》《同世代の友人の減少》など【人間関係の縮小】で孤立しやすい状況であることが明らかになった。

社会面の課題は、《危険でも屋根の雪下ろしをする》《商店が1軒しかない》《年金が少ない》《昔を思えば便利になった》など【妥協した生活】であった。しかし、《住み慣れたここが良い》《嫁さんに気を使う》《子どもや孫がくるのが楽しみ》《野菜を作って子どもたちに食べさせるのが楽しみ》など【1人暮らしへのこだわりと覚悟と不安】があった。高齢者は、畑仕事を継続することで子どもや兄弟に貢献していた。子どもや孫、兄弟との関係を継続することが社会とのつながりでもある。1人暮らし男性高齢者が社会的に孤立しないためには、適度な距離を保ち誰かの見守りが必要であることが示された。

(2) 主観的幸福感調査：Q島、M町、E町、U町及び東北地方と関東地方の都市近郊在住の65歳以上の住民345名を対象にPGCモラルスケール改訂版を用いて主観的幸福感調査を行った。分析対象者は、1人暮らし95名、配偶者と2人暮らし150名、子と同居89名、配偶者と子と同居11名であった。性別と主観的幸福感の差について、Mann-WhitneyのU検定で比較した結果、 $p<0.05$ で有意差が認められた。表1に示す。同居家族の有無と1人暮らしの差についてKruskal-Wallis検定およびMann-WhitneyのU検定(Bonferroniにより有意確率の値を調整)を行った結果、 $p<0.05$ で有意差が認められた。表2に示す。各地域間の比較をMann-WhitneyのU検定で行ったが、有意差は認められなかった。

表1 性別と主観的幸福感の差

	性別	中央値(四分位範囲)	平均ランク	p値
主観的幸福感	男	13(11-15)	187.62	*
	女	12(9-14)	162.15	

$p<0.05^*$

表2 同居家族の状況と主観的幸福感の差

	同居家族の状況	中央値(四分位範囲)	平均ランク	p値
主観的幸福感	1人暮らし	12(10-14)	174.38	* * * * P<0.05*
	配偶者と2人暮らし	13(10-14)	258.36	
	子と同居	11(8-15)	157.29	
	配偶者子と同居	15(13-17)	175.19	

(3) 高齢者支援の現状と課題：M町地域包括支援センター担当者2名とU町高齢福祉課担当者2名、E町地域包括支援センター担当者1名から聞き取り調査を行った。階層的クラスタ分析の結果を図1で示す。共起ネットワーク分析の結果を図2で示す。支援の現状としては、【高齢者の見守り】【除雪の助成金】【介護支援サービスへ繋げる】であった。課題としては、【高齢者が頑張り過ぎる】【1人暮らしの不安を抱えている】【男性は集まり参加しない】であった。特にM町及びE町は地域支援センターの職員は、地域住民の家と顔が一致しており気になる高齢者の家には適宜訪問していた。3地域は町内に役場や地域包括支援センターがあるため、行政が支援の必要性を確認し、対策を計画し、実行していた。しかし、Q島では島内に行政機関がなくQ島の高齢者の現状を把握する機会が限られることから、行政のサービスを受けづらい状況にあった。Q島の1人暮らし高齢者が孤立しないためには、行政と住民が協力して地域支援ネットワークの構築が早急の課題であることが明らかになった。

これらの結果から、身体面の課題は身体を維持するために健康管理が重要である。心理面の課題は、子どもや孫、兄弟など限られた人間関係であった。そのため、地域で孤立しやすい状況であることが考えられる。社会面の課題は、高齢者は、畑仕事を継続することで子どもや兄弟に貢献していた。子どもや孫、兄弟との関係を継続することが社会とのつながりである。1人暮らし男性高齢者が社会的に孤立しないためには、適度な距離を保ち誰かの見守りが必要であることが示された。

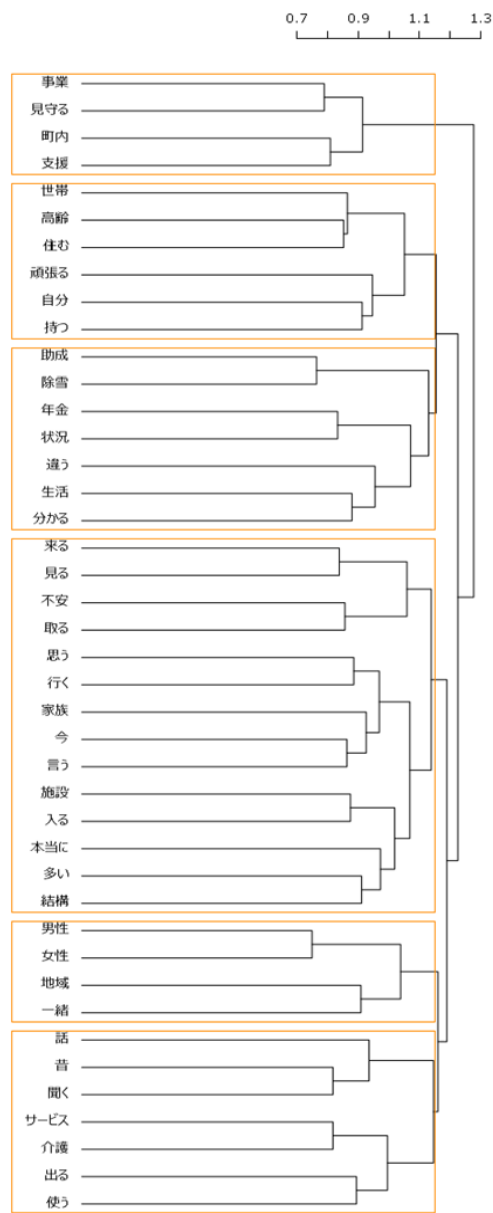


図1 支援の現状と課題・階層的クラスター

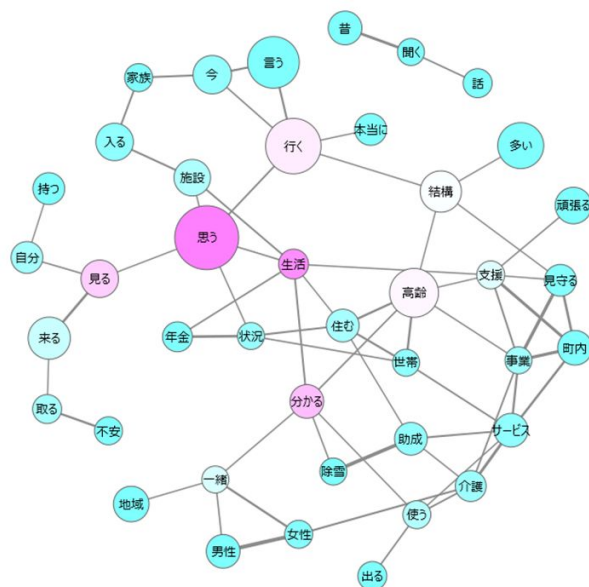


図3 支援者の現状と課題ネットワークズ

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 7件)

Kimie FUJIKAWA, Yasuo TANAKA, Clarification of Psychosocial Factors Required for Continuance of Life of Elderly Men Living Alone in Heavy Snowfall and Underpopulated Areas, *Journal of Rural Medicine*, 査読有, 14 巻 1号, 2019, p36-41

藤川君江, 田中康雄, 一人暮らし男性高齢者の生活を支える身体的・心理的・社会的要因と生活課題 - 過疎・高齢化の豪雪3地域の後期高齢者を対象として -, *日本人間関係雑誌*, 査読有, 23 巻 1号, 2018, p11-19

藤川君江, 風間みえ, 五十嵐貴大, 消滅危惧集落の離島で生きる1人暮らし男性高齢者の孤立要因, *日本「性ところ」関連問題学会誌*, 22 巻 1号, 2018, p142-148

田中康雄, 藤川君江, 中山間地の限界集落における一人暮らし男性高齢者が抱える生活課題, *社会福祉科学研究*, 査読有, 第7号, 2018, p25 - 33

藤川君江, 渡辺俊之, 限界集落の Q 島の元漁師の一人暮らし男性高齢者 - 生活を支えている心理社会的要因 -, 人間関係学研究, 査読有, 第 22 巻 1 号, 2017, p27-3
藤川君江, 田中康雄, 消滅危惧集落の離島で生きる一人暮らし男性高齢者の生活課題, 地域サイエンス雑誌, 査読有, 4 号, 2017, p153-159
藤川君江, 田中康雄, 風間みえ, 豪雪・過疎地域の一人暮らし後期男性高齢者の生活の特徴, 日本医療科学大学紀要, 査読有, 10 号, 2017, p67-75

[学会発表](計 6 件)

田中康雄, 藤川君江, 限界集落の一人暮らし男性高齢者における生活課題の分析, 日本人間関係学会第 26 回全国大会, 2018 年
Kimie FUJIKAWA, Health Awareness in Elderly Men Living alone: Aimed at four areas of depopulated and aged villages, 20th International Association of Rural Health and Medicine (IARM20), 2018 年, (Tokyo Japan)
藤川君江, 広瀬公治, 白戸亮吉, 過疎地域と都市近郊地域に居住する高齢者の口腔衛生に関する意識, 日本口腔衛生学会大会 第 67 回日本口腔衛生学会・総会, 2018 年 5 月
藤川君江, 消滅危惧集落の Q 島で生きる 1 人暮らし男性高齢者の生活行動, 第 9 回日本性ところ関連問題学会学術研究大会, 2017 年
藤川君江, 田中康雄, 風間みえ, 過疎高齢化地域における 1 人暮らし男性高齢者の交流関係の現状と課題 豪雪 2 地域と離島 1 地域を対象に検討, 日本人間関係学会 第 25 回全国大会, 2017 年
藤川君江, 田中康雄, 豪雪過疎化地域で生きる一人暮らし男性高齢者の生活と感情の特徴, 日本人間関係学会, 第 24 回全国大会, 2016 年

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 田中康雄
ローマ字氏名: TANAKA, Yasuo
所属研究機関名: 浦和大学
部局名: 総合福祉学部
職名: 准教授
研究者番号(8桁): 40635158

(2) 研究協力者

研究協力者氏名: 谷中紳多郎
ローマ字氏名: YANAKA, Shintarou
研究協力者氏名: 阿部治雄
ローマ字氏名: ABE, Haruo

科研究による研究は, 研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため, 研究の実施や研究成果の公表等については, 国の要請等に基づくものではなく, その研究成果に関する見解や責任は, 研究者個人に帰属されます。